

平成31年3月改訂版 福井県

福井は名水とともに有り

ふくいのおいしい水

「福井」の名は、清らかな水が豊かに溢れることに由来しています。

聳^{そび}える「緑」は天からの水を育み、

凜^{りん}とした湧水・清^{しみず}水となって「命の水」へと流れます。

ふくいの名水「おいしい水・越山若水」を、ご堪能ください。

Fukui's Refreshing Natural Spring Water



福井は、湧き出し溢れ出し命をつなぐ「巨大な水瓶」

福井県は、日本海に面した山国、総面積のおよそ8割が山地です。豪雪地帯である福井の山地には豊かな深い原生林が存在し、たっぷりの栄養豊かな清らかな水を蓄えます。やがて蓄えられた水は、山々から源流となり山脈の谷間に流れを生み出し滝となり川となります。また、地下にも大量の水が浸透し、幾重もの地層によるろ過を繰り返しながら総面積約2割の平地や扇状地・盆地の豊かな地下水脈を形成しています。

山々に囲まれた扇状地・盆地は、いわば巨大な水瓶(みずがめ)となり、そこには数多くの伏流水が湧き出し、あちこちに清らかな湧水が出現し、中流域からは私たち人間に「命の水」の恩恵をもたらし、日本海を目指して流れていきます。こうした水の豊かさが「福井」という名の語源になったとも言われています。

豪雪地帯特有の、硬すぎず柔らかな味わいのあるおいしい水は、福井の人々にとって、いにしえの昔から「命の水」となっています。

厳選された35か所、極上の名水たち

福井県では、平成17年から120か所を超える県内の湧水や井戸等を調査し、その中から本当においしい自然の水を味わえる35か所の名水「ふくいのおいしい水」を厳選しました。

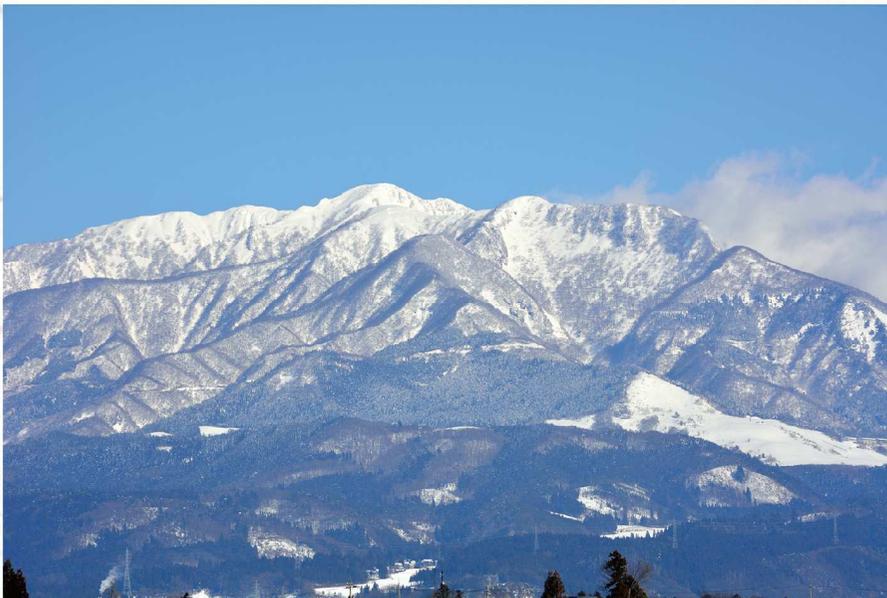
この中には、環境省の名水百選に選定されたところもあれば、昔から地域の人々に愛され使い続けてきた小さな水場もあります。

未来へ向けて強く願うこと

福井の人々にとって「水」がおいしいのはあたり前になっていることは当然の環境と言えるのですが、水は無敵ではありません、限られた資源です。豊かな福井の水であっても、人間生活の近代化拡大と地球環境の変化から徐々に地下水脈の水位が下がり、また、水量も少なくなってきたのも事実です。

こうした福井の「命の水」、「福井県の宝である命の水」を県民の皆様にも再認識していただき未来へつなげていっていただきたい、また、県外からの観光客の皆様にも本当のおいしい水を味わっていただきたい、そんな願いを込めてこの冊子を作成しました。

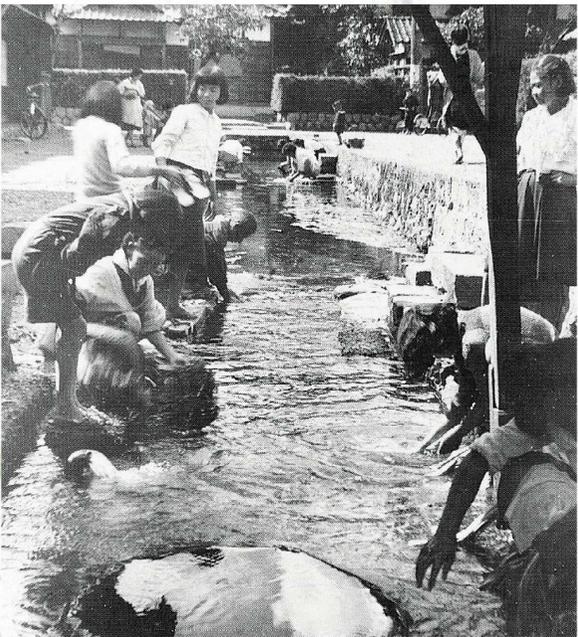
「ふくいのおいしい水」の味を、味覚の記憶として、是非ともご堪能いただきたいと思っております。



大野市から白山方面、左から「法恩寺山」「経ヶ岳」を臨む。この山々がたっぷりの水を蓄える。



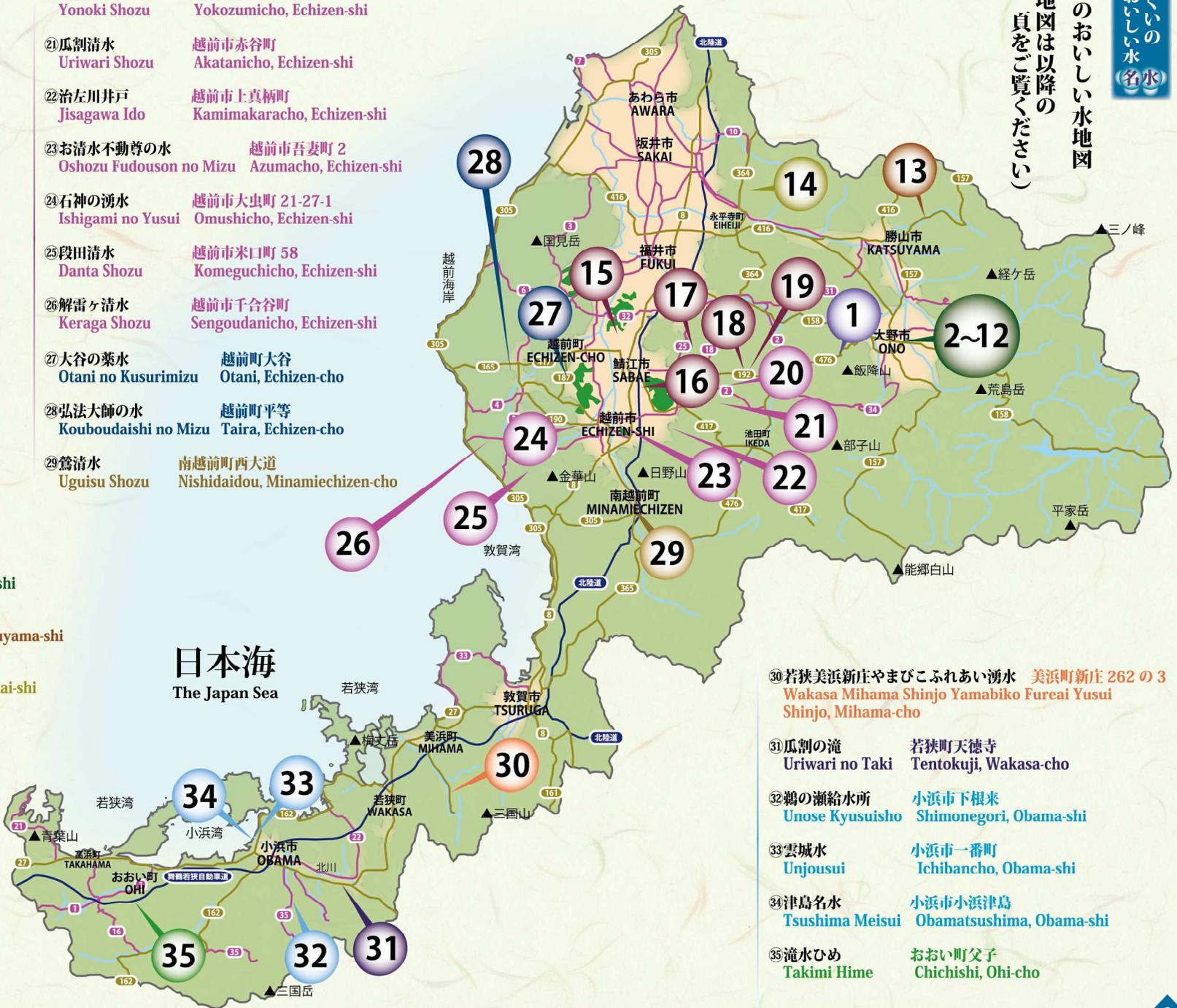
昭和30年頃の福井県大野市の湧水地「御清水」。
福井では清水を「しみず」とは読まずに「しょうず」と言います。
こうした湧水地は、生活のコミュニティーの中心として人々を結びつけてきました。夏は冷たく冬は暖かい清らかな湧水、人々は賢くこの「命の水」と親しんできました。
これが福井の伝統です。(写真提供:大野市)



ふくいのおいしい水地図
(詳細地図は以降の
頁をご覧ください)

- ① しょうずの湧水 福井市南野津又町 33 字 3-14
Koshozu no Yusui Minaminotsumatacho, Fukui-shi
- ② 本願清水 大野市糸魚町 8-44
Hongan Shozu Itoyocho, Ono-shi
- ③ 御清水 大野市泉町 4
Oshozu Izumicho, Ono-shi
- ④ 義景清水 大野市泉町 10
Yoshikage Shozu Izumicho, Ono-shi
- ⑤ 新堀清水 大野市城町 1
Shinbori Shozu Shiromachi, Ono-shi
- ⑥ 芹川清水 大野市元町 1-2
Serigawa Shozu Motomachi, Ono-shi
- ⑦ 水舟清水 大野市元町 1-2
Mizufune Shozu Motomachi, Ono-shi
- ⑧ 石灯籠会館清水 大野市本町 1-15
Ishidouroukaikan Shozu Honmachi, Ono-shi
- ⑨ 七間清水 大野市元町 6-10
Shichiken Shozu Motomachi, Ono-shi
- ⑩ 五番名水庵清水 大野市明倫町 10-22
Goban Meisui-an Shozu Meirincho, Ono-shi
- ⑪ 清水広場 大野市弥生町 1-16
Shozu Hiroba Yayoicho, Ono-shi
- ⑫ 篠座神社の御霊泉 大野市篠座町 42-5
Shinokurajinja no Goreisen Shinokuracho, Ono-shi
- ⑬ 神谷の水 勝山市村岡町栃神谷
Kamiya no Mizu Tochikamiya Murokocho, Katsuyama-shi
- ⑭ 小和清水 坂井市丸岡町上久米田
Kowa Shozu Kamikumeda Maruoka-cho, Sakai-shi
- ⑮ 榎清水 鯖江市米岡町 6-5
Enoki Shozu Yoneokacho, Sabae-shi
- ⑯ 許佐羅江清水 鯖江市定次町 15-22
Kosarae Shozu Sadatsugicho, Sabae-shi
- ⑰ 刀那清水 鯖江市上戸口町 46-1-1
Tona Shozu Kamitonokuchicho, Sabae-shi
- ⑱ 三場坂清水 鯖江市上河内町 82 字 奥如来
Sanbazaka Shozu Kamikouchicho, Sabae-shi
- ⑲ 桃源清水 鯖江市上河内町 68 字 上水掛
Tougen Shozu Kamikouchicho, Sabae-shi

- ⑳ 榎清水 越前市横住町
Yonoki Shozu Yokozumicho, Echizen-shi
- ㉑ 瓜割清水 越前市赤谷町
Uriwari Shozu Akatanicho, Echizen-shi
- ㉒ 治左川井戸 越前市上真柄町
Jisagawa Ido Kamimakaracho, Echizen-shi
- ㉓ お清水不動尊の水 越前市吾妻町 2
Oshozu Fudouson no Mizu Azumacho, Echizen-shi
- ㉔ 石神の湧水 越前市大虫町 21-27-1
Ishigami no Yusui Omushicho, Echizen-shi
- ㉕ 段田清水 越前市米口町 58
Danta Shozu Komeguchicho, Echizen-shi
- ㉖ 解雷ヶ清水 越前市千合谷町
Keraga Shozu Sengoudanicho, Echizen-shi
- ㉗ 大谷の薬水 越前町大谷
Otani no Kusurimizu Otani, Echizen-cho
- ㉘ 弘法大師の水 越前町平等
Kouboudaishi no Mizu Taira, Echizen-cho
- ㉙ 鶯清水 南越前町西大道
Uguisu Shozu Nishidaidou, Minamiechizen-cho



- ⑳ 若狭美浜新庄やまびこふれあい湧水 美浜町新庄 262 の 3
Wakasa Mihama Shinjo Yamabiko Fureai Yusui Shinjo, Mihama-cho
- ㉑ 瓜割の滝 若狭町天徳寺
Uriwari no Taki Tentokuji, Wakasa-cho
- ㉒ 鶴の瀬給水所 小浜市下根来
Unose Kyusuisho Shimonegori, Obama-shi
- ㉓ 雲城水 小浜市一番町
Unjousui Ichibancho, Obama-shi
- ㉔ 津島名水 小浜市小浜津島
Tsushima Meisui Obamatsushima, Obama-shi
- ㉕ 滝水ひめ おおい町父子
Takimi Hime Chichishi, Ohi-cho

1 こしようずの湧水

福井市南野津又町33字3の14



古くから地域住民の「命の水」として大切にされてきた「こしようずの湧水」。まだまだ知られていない穴場名水です。

池田町から大野市街を結ぶ国道476号、南野津又の集落を抜けて少し峠道に入り、静かな木立に包まれたころ、道路脇に「こしようずの湧水」があります。背後にある美山三山のひとつ飯降山（標高884m）のろ過作用により生み出された、適度なミネラルを含む冷たくまろやかさが自慢のこの湧水は、昔から林業者や農業者が仕事の合間に飲用するなど愛されてきました。

平成24年に地域の人々によって整備されてからはツリーリングや観光に来た方の休憩場となっています。

この水で作られた米の味は評判が良く、地酒の「黎明」の仕込みにも使用されています。また、この地域の水と土壌は、真っ赤で明るく丸い形の伝統野菜「河内赤かぶら」を育みます。清水を利用した蕎麦も有名で、この国道は蕎麦街道とも呼ばれ、秋にはそば祭りも開催されます。なお、周辺には美肌の湯と言われる「伊自良温泉」、県指定文化財の古拝殿と木造阿弥陀如来坐像がある「樺八幡神社」、子供の自然体験ができる「NPO自然体験共学センター」などがあり、こしようずの湧水と併せて立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

隠れた名水を多くの人に味わって欲しい

その昔、南野津又集落の人々は、大野の城下町に峠を越えて行き来したと言われています。この時に人々の喉を潤したのが「こしようずの湧水」でした。また、炭焼きで山に入る人々にとっても「命の水」であったと言われています。真夏でも11℃程度の清らかな冷たい水は、乾いた身体に最高のご馳走であったに違いありません。

最近まで山肌湧き出していたこの名水ですが、一見ただけではわからないため、地元住民の尽力により湧き出る場所にはパイプが取り付けられ飲みやすくなっています。

また、この「湧水」から約50mほど下ったところに「こしようずの滝」があり、環境教育の貴重な場所として利用されています。

この清らかな水が流れ込む南野津又町では6月、蛍が乱舞し大変美しい光景を見ることが出来ます。

冬から早春にかけて豪雪により通行止めになりませんが、驚くべきことに、南野津又集落の人々は現在でも雪解けを待ちわび、春の訪れの楽しみとしての「名水」の水を汲みにいくということです。



美山三山のひとつ飯降山(標高884m)。この山がたっぷりの水を蓄え、名水を生み出します。



「こしようずの滝」

こしようずの湧水から50mほど離れた下方には、こしようずの滝があります。この50mの山道も地元住民により整備されました。

山野草の観察から昆虫たちの観察まで様々な楽しみがあります。水場にはサンショウウオも生息し、その水の清らかさの証にもなっています。



<アクセスのご案内>

池田から大野市街に抜ける国道476号沿い、南野津又地区を過ぎ峠道を500m程上ったところの右手。





絶滅危惧種イトヨ(写真提供:大野市)

写真上のイトヨは体にトゲを持つ体長5cmの小さな魚です。きれいな冷たい水でしか生息できないため、名水の町「越前大野」のシンボルとして昔から「ハリシン」という名前で親しまれてきました。

このイトヨが生息する池のほとりに本願清水の名水を誰でも飲むことができるように湧水場が作られています。イトヨの生息する湧水池を臨みながら本願清水の名水を味わってみてください。



住宅地の中に、忽然と現れる本願清水と湧水池、かつて上水道が普及していなかった頃は、命の水として人々の生活を支えてきました。

大野盆地全体が大きな水瓶

大野市は、福井県の東部に位置し、北は石川県、東と南は岐阜県、霊峰白山の支脈である赤鬼山や経ヶ岳、日本百名山の一つである荒島岳など、秀峰に囲まれた盆地にあります。

この山々がたつぷりと豊かに水を蓄え、日本海へ向けて流れ出します。大野市内には九頭竜川や真名川、清滝川、赤根川などの一級河川が南から北へ流れています。豊かな水の流れは、地上だけでなく地下にも幾層の地下水脈を作っています。こうした条件から、大野盆地全体が地下ダム型帯水盆を形成しています。つまり、大野市の市街地がある大野盆地全体が大きな水瓶

になっています。そのため、大野市街地には数多くの湧水が湧き出し、人々は湧水と共に生きてきました。これが水と人が共生する越前大野特有の「湧水文化」を生み出してきました。この冊子でも大野市の湧水を数多くご紹介しています。特別な条件を持つ大野市の「湧水文化」を是非訪ねて、名水を味わってください。

本願清水は、約430年前、織田信長の部将である金森長近が大野郡を統治し、京都に模した城下町を建設した際、水量が豊富であった本願清水の湧水を市街地まで導き、生活用水として利用したといわれています。名前の由来は、その昔、このあたりに本願寺派の寺があった、あるいは、本願寺派の門徒を使って掘り広げられたからとも伝えられています。

湧水池は、希少水生生物であるイトヨ（陸封型）の生息地として昭和9年に国の天然記念物に指定されています。ここには、大野市内に生息する約1万匹のイトヨの内、約6千匹が生息しています。

かつて大野市にはたくさんイトヨの生息地がありましたが、現在では、本願清水のほか、数か所のみとなっています。

隣には、市のイトヨ資料館「本願清水イトヨの里」が整備されており、イトヨの生息をガラス張りの施設内から自然の姿のまま観察ができるようになっています。

さらにイトヨだけでなく、水中に湧き出す湧水の様子も観察でき、普段は見ることのできない湧水池の内部を見ることができます。



左の写真は、昭和34年頃の本願清水湧水池の様子です。イトヨと子どもたちが共生する微笑ましい写真です。本願清水がいかに人々に利用されてきたのがわかる貴重な資料です。(写真提供：大野市)

<アクセスのご案内>

大野市街地の国道158号 篠座交差点を北上すると本願清水イトヨの里があり、施設の脇に清水が位置する。





武家屋敷の人々が厳しい規律とともに守ってきた御清水、今では綺麗に整備されていますが大野の歴史を感じることのできる清水です。

越前大野城が建つ亀山の東麓の湧水帯にある清水の一つで、かつて城主の飯米をとぐ（炊く）ために用いられたことから、「殿様清水」とも呼ばれています。

現在、泉町と呼ばれるこの一帯は、江戸時代には武家屋敷が建ち並び、家中の人々が生活用水として御清水を使っていました。武家屋敷の人々はしつけも厳しく、常にこの清水を清潔に保ち、上流から順番に飲料水、果物などを冷やすところ、野菜などの洗い場などと定めて大切に使われていました。

この名残が、明治・大正・昭和の時を経て、現在もお不文律として地域の住民たちに受け継がれ、住民の皆さんの社交場にもなっています。

現在ではきれいに整備された清水となっていますが、御清水の上流側には、小さなお地蔵さんが祀られておりお花とお供え物が綺麗に並べられています。

こうした、「命の水」に感謝する水とともに生活してきた人々の表現が、大野特有の水との共生「湧水文化」の表れであり、未来に残していきたい「自然の恩恵」に対する「おもてなし」の心となっています。



綺麗に管理されている名水地蔵尊。人々の心が伝わってくる。



夏場、子どもたちの遊び場ともなる御清水。



冒頭のページでも紹介した昭和30年頃の御清水。人々の生活が窺える。(写真提供:大野市)

御清水

天正年間、大野に入封した金森長近公が城下町大野を築いたとき「清水町の南方に方四十間の水溜りを設け城廓内濠の源泉として押門を設け災害又は戦争にも備えた」と大野町史に記されているのが当地と伝えられています。また藩主の「米かき水」として利用したので列名「殿様清水」とも呼ばれています。

水清き大野の象徴として親しまれ現在では共同洗場として重要な役割を果たしています。ここにも以前は陸封型「イトヨ」が伝っていました。冬から春にかけての地下水位低下による慢性的な湧水の枯渇現象により現在は生息していません。

昭和五十九年十月

大野市

御清水横看板より記載

<アクセスのご案内>

大野市街地にある「結ステーション」より南へ徒歩2分。



観光客で賑わう御清水、名水百選にも選ばれている。

よしかげしょうず
義景清水
いずみちよう
大野市泉町10

平成30年9月5日に、新たに「ふくいのおいしい水」として大野の名水が認定されました。義景公園の中にある義景清水です。

この義景清水のある義景公園には、大野市指定史跡の朝倉義景墓があります。この史跡があることで古くからこの地域で湧き出す清水は、総称して義景清水と呼ばれてきました。かつては、曹洞宗の尼寺一乗寺（一乗庵）

があり、住職の庵主（あんじゅ）さんが朝倉義景公の墓地を守ってきたと伝えられています。この尼寺の周りに人々が集い、湧き出す清水を生活の水として利用し生きてきた、歴史ある湧水の地です。

今回認定されたのは、義景墓を正面に見て、右手横にある休憩所左にある義景清水です。この清水のすぐ近くには水琴窟があり、美しい音色を楽しむことができます。この公園の別の場所には「イトヨが生息する清水」もあり、イトヨを見ることが出来ます。



しんぼりしょうず
新堀清水
しんぼり
大野市城町1

亀山の南側を流れる新堀川は、今から440年程前の天正年間前半に金森長近公が大野城を亀山に建設した際に、外堀として掘られたものと言われています。

今では、町のせせらぎ・小川として残っており、希少水生生物のイトヨも生息しています。その新堀川沿いに新堀清水は湧いています。

数十年前まで、豊富に湧き出していたこの清水は、地域に住む人々の生活用水として利用され、夏はこの清水上流側で野菜を冷やし、下流側で洗濯を行うなど、自然の恩恵を享受していたそうです。

また、子供たちの遊び場として、また人々の井戸端会議の場所として利用されていることは、今でも伝統として水場に息づいているようです。

平成23年、新堀清水は、現在の姿に改修され、越前大野城に隣接した観光スポットとなっています。



朝陽を浴びる朝倉義景墓(写真右上)。向かって右奥には、高德院・祥順院・愛王丸の墓がありこれらの墓は地域の人々によって大切に守られ花がなくなることはない。この義景墓に向かって右側の休憩所(義景庵)横に義景清水がある。義景墓の斜め向かいにはイトヨの生息する清水がありイトヨ解説看板(写真左上)がある。

イトヨのオスとメス

※12月から3月までの積雪時は、閉鎖になります。

<アクセスのご案内>

大野市街地にある「結ステーション」より南へ徒歩5分。



<アクセスのご案内>

大野市亀山の山裾、国道476号線沿い裁判所の西にある。



昭和30年代の新堀清水 「ふるさと大野今昔物語事業収集写真」より

【井】ふくいの水
おいしい水名

6 芹川清水
せりがわしよす
大野市元町1の2



武家屋敷を感じさせる風情の中にひっそりとしたたたずまいを感じさせる芹川清水。武家屋敷旧内山家と平成大野屋の境となっている用水は「芹川（せりがわ）」と呼ばれ、江戸時代武家屋敷と町人屋敷とを区別する重要な小川として、許しのない限り勝手には越えられない場所でした。

この清水は芹川に合流し、武家屋敷旧内山家の横を通り百間堀に注がれています。



＜アクセスのご案内＞
大野市街地にある「結ステーション」すぐの「平成大野屋」の脇にある。



【井】ふくいの水
おいしい水名

7 水舟清水
みずふねしよす
大野市元町1の2



水舟とは、谷や川から取水し、いくつかの段に分けて利用する貯水槽で、かつては台所の一部でした。上段は飲料水として、中段では野菜を、一番下の段は鍋や釜を洗っていました。

大野市の山間部集落では、木を半分に割ってくり抜いた水舟が利用されていました。



＜アクセスのご案内＞
大野市街地にある「結ステーション」すぐの「平成大野屋」二階蔵の軒下にある。



【井】ふくいの水
おいしい水名

8 石灯籠会館清水
いしとうろうかいかんしよす
大野市本町1の15

石灯籠通りの西端にある市街観光客の無料休憩所「石灯籠会館」にあり、地下水を汲み上げ、水場で飲めるようになっています。

石灯籠通りには、金森長近公が、街づくりのときに水繩を埋めて測量の基点とし、地藏尊を祀った石灯籠地蔵尊があります。



＜アクセスのご案内＞

大野市街地、木町通りと石灯籠通りが交差する場所にある石灯籠会館の前。



【井】ふくいの水
おいしい水名

9 七間清水
しちけんしよす
大野市元町6の10

大野市中心部にあり、朝市が開かれる七間通りで操業している酒造会社が、醸造用に使用している地下水をミネラルウォーターとして販売している他、店の前に水場を設け、誰でも自由に飲めるようにしています。



七間清水
七間清水の由来は、昔、七間川の伏流水に恵まれた清らかな町です。古より町の各々に清水が湧き出しておりました。お清水が昭和六十年、環境庁の指定した「名水百選」となり、平成十八年に七間清水が「ふくいのおいしい水」に認定されました。

この水は、奥前の芳醇な酒を造るのに欠かせない酒蔵秘蔵の仕込水として現在も喜ばれています。

＜アクセスのご案内＞

大野市街地、七間通りと四番通りの交差点にある酒造会社の軒下にある。





眼病に効くと言われている御霊泉。遠方からこの霊水を求めて篠座神社を訪れる人も多い。眼をこの水で清めるときは、左目、右目の順で清めると良いと言われています。



篠座神社の鎮守の森は、大変豊かな生態系を有し、御霊泉の池と復活させた水場には、町場としては貴重なモリアオガエル(写真上)が生息。梅雨時にはモリアオガエルの卵(写真下)を見ることができます。



養老元年(717年)の創建と伝えられる篠座神社の神域一帯が湧水地となっており、拜殿右手の弁天池のほとりに御霊泉があります。大国主命が「目の病気に効く霊水を与えた」という伝説があり、「篠座目薬」といわれて遠方から水を汲みに来る人もいる伝説の名水です。

かつては、境内敷地(本殿に向かって左側)も、古くから湧水が湧き出し、入り口である鳥居手前には地域住民が使った生活の水場としての川端(かばた)があったといわれ、その水は境内の中を流れていました。

現在、「百年先の鎮守の森作り」が神社と地域住民の協力によって推進され、かつての水場を見事に復活させました。敷地内には町場としては珍しくモリアオガエルが生息し、昔ながらの姿である見事な鎮守の森が残されており、豊かな生態系を有しています。

<アクセスのご案内>

大野市街地の南側にある篠座神社の境内。



篠座神社旧境内図

福井 ぶくいの水
おいしい水名

12

篠座神社の御霊泉

大野市篠座42の5



<アクセスのご案内>

大野市街地、五番通り商店街にある休憩所「五番名水庵」の軒下にある。



福井 ぶくいの水
おいしい水名

10

五番名水庵清水

大野市明倫町10の22

五番通りに面して五番名水庵が建っており、市民の憩いの場および観光客の休憩所として利用されています。その表に地下水を汲み上げ水場を設けて、飲めるようになっていきます。

福井 ぶくいの水
おいしい水名

11

清水広場

大野市弥生町1の16



<アクセスのご案内>

JR 越美北線「越前大野駅」前。



JR越前大野駅駅舎左手にある清水広場。清水の街の象徴のように存在しています。大野駅を出たらまずは寄ってみたい名水です。

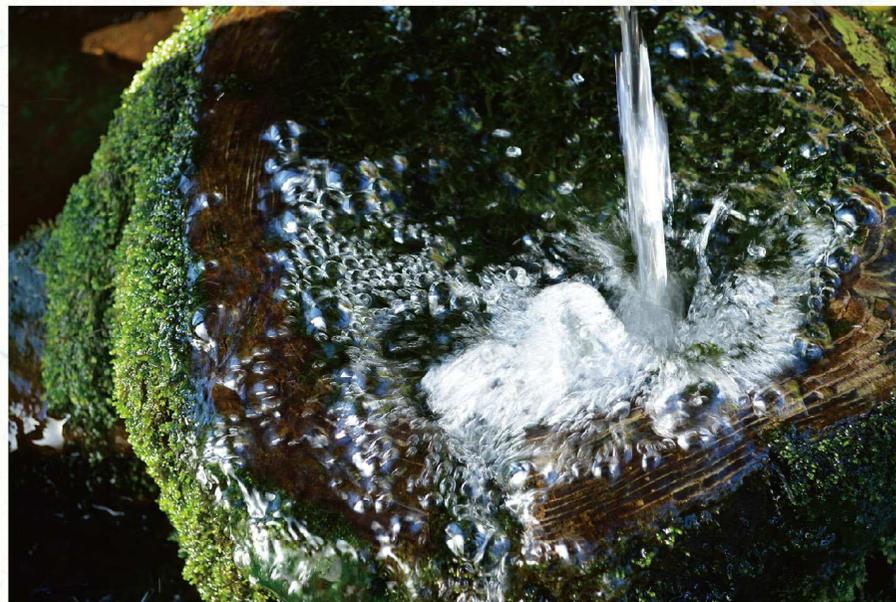
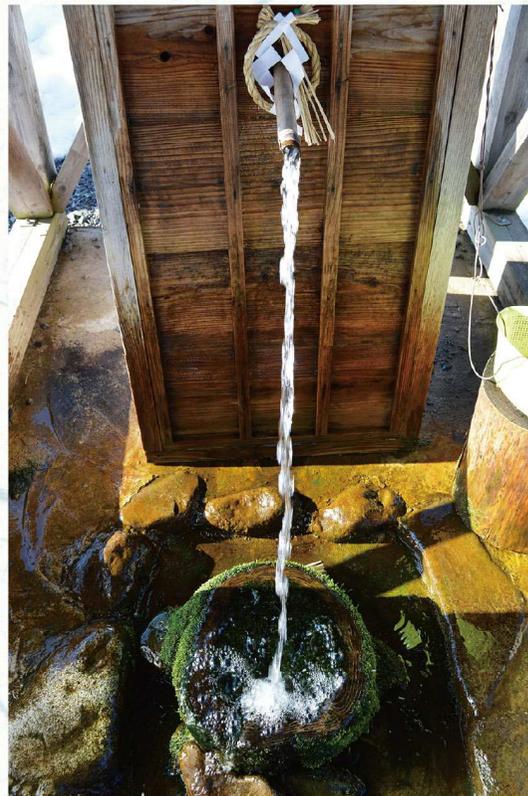
溢れ出る清水は水路に流れ出し、里芋を洗う芋車を回す風情あるおちついた佇まいをかもし出しています。



勝山市街から国道157号を石川方面へ北進し、暮見トンネルを過ぎた栃神谷集落の端に巨大水車があります。この水車の脇に神谷の水があります。

神谷の水の吹き出し口にはしめ縄が祀られ、大切にされてきた水であることがうかがえます。

巨大水車は、平成22年に地元住民の皆さんの手で作られたものです。



住民たちの強い気持ちで残った名水

この神谷の水は、15年前まで栃神谷地区の簡易水道として住民の人々に使われ続けてきたものです。この神谷の水から約700m離れた山の中腹、岩の間から水が湧き出ており地中配管でここまで導かれています。

しかしながら、長年にわたる使用によって配管の一部が老朽化。過疎化と高齢化に対応するため各家へは市の上水道が完備されました。

ところが、この清らかで慣れ親しんだ水に愛着を持つ住民も多く、「市の上水道とは別にこの水を残して欲しい」という要望により、老朽化した配管を新しくし、現在の場所に水飲み場が設置されました。まさに「神の谷の水」が復活したわけです。

水源もしっかり整備されたため、水が濁ることがなく透明度が極めて高い名水です。

上水道が完備されたにも関わらず、ここには多くの近隣の住民が訪れ、この神谷の水を生活の水として利用しています。



入れ替わり立ち代りにこの神谷の水を汲みに訪れる地元住民。名水と言われるだけあってその人気は高い。



<アクセスのご案内>

勝山市街より石川県方面へ向かう国道157号線沿い、暮見トンネルを抜けて栃神谷集落に位置する。巨大水車が目印。



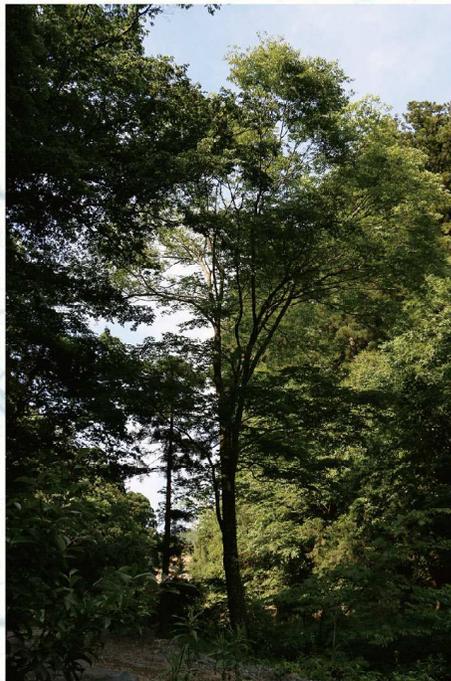
福井県の中でも豪雪地帯に位置する勝山市村岡町神谷。白山の支脈山系が蓄えた水がここに湧き出しています。



この圧倒的な水量(自噴です!)



遠方から小和清水を汲みに来る人も多い。



ご覧のような鬱蒼とした森の傍らにある小和清水。砂利道に面している。



<アクセスのご案内>

国道364号上久米田交差点を竹田地区方面へ北進。八幡神社を過ぎ、左へアピんカーブがある場所の脇の砂利道を250m程進んだ先の左手。



圧倒的に豊富な水量

小和清水は、六呂瀬山古墳群の東方に位置する清水です。その水量は大変多く、自噴の力で大量の水が岩間から噴出しています。

その昔、この清水は、上久米田集落の人々しか知らない隠れた名水でした。水場までの道は、昔、林道であったため、集落の住民たちは、代々、歩いてこの水を汲みに行き、料理やお茶を入れる際の水として利用してきました。また、山仕事をする人たちには、仕事の合間の休息のための飲み水として利用してきました。

さらには、嘉永6年(1853年)の大干ばつの時にもこの水は涸れなかったため、地域の住民が、この清水のおかげで難を逃れたという言い伝えもあります。

このように、小和清水は数百年の昔から地域の住民にとっての「命の水」として珍重されてきました。

現在では、林道は周辺の工事に伴い、砂利道へと拡張されたことにより、昔とは風貌が変化しましたが、今でも集落の住民は好んでこの水を使い続けています。

福井全体の清水・名水を見た場合、旧坂井郡に位置する小和清水は大変貴重な存在です。上久米田集落としても宣伝をしていなかったため、あまり知られていない清水ですが、それでも噂を聞きつけてこの水を遠方から汲みに来る人々もいます。

前述のとおり、近くには六呂瀬山古墳群があります。上久米田の丘陵上に4基の古墳があり、1号墳は全長約147m、3号墳は全長約90mの前方後円墳(鍵穴状の形をした墓)、北陸最大級の前方後円墳を含む古墳群です。

小和清水を訪れた際には是非古墳群もご覧になってはいかがでしょうか。



千古の昔から潤れたことのないと言われる榎清水



千古の昔から潤れたことのない名水

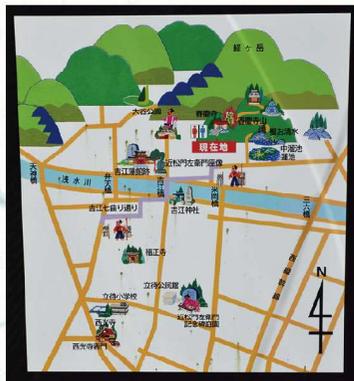
榎清水は、千古の昔より湧き出ているとされている大変歴史の古い名水です。泰澄大師が越知山大谷寺へ修行に向かう途中で、越知山を仰ぐこの地に立ち寄り、現在の春慶寺の始まりとされる草庵を結んだと伝えられることから、この榎清水と深い関わりがあったと言われています。

また、織田信長が朝倉一乗谷を攻めるに当たり、春慶寺の西の方にあった吉谷千坊を攻め落とす必要があったことから、この清水を炊事場として使用するよう木下藤吉郎に命じて石組を造らせたと言われています。

さらに、信長の焼き討ちから逃れた吉谷千坊の僧侶がこの水を飲んで息を引き取ったことから「末期の水」とも言われています。その後、1645年に福井藩の支藩、吉江藩藩主松平昌親公によつて榎清水は整備され、藩のお泉水として笏谷石（しゃくだにいし）で3つの仕切りに囲み、飲み水と洗濯場に分かれていたと伝えられています。

また、吉江藩藩士、杉森信義の次男信盛（後の近松門左衛門）が、幼少期を吉江で過ごしたことからこの清水で水遊びに興じたとも伝えられています。

このように様々な歴史と縁ある榎清水は、現在に至るまで、地域の人々の生活用水として大切に守られ、千古の昔から一度も潤れることなく清らかな水を満たし続けている名水です。



写真左のように、この名勝地には様々な案内板などが整備されています。写真右は徳川家の家紋「三つ葉葵」の原形「二葉葵」。榎清水を正面に見て左手方向にある「西溜池」ほとりの植栽地に二葉葵が植栽されています。徳川家康のひ孫にあたる吉江藩主松平昌親公の家紋も「三つ葉葵」です。こうしたことから「三つ葉葵」ゆかりの地としても有名です。



榎清水の前には湧水池が広がっています。写真右中央にあるのは近松門左衛門にちなんだ三味線のぼちのモニュメントです。

<アクセスのご案内>

鯖江市西縦貫線より浅水川の三六橋北詰から川沿い。





トミヨを観察できる水槽。専門家チームにより、この湧水でトミヨ復活の実験を行っています。



トミヨの生息に欠かせないバイカモ(水草)の根付き実験が進んでいます。



トミヨ 写真提供:石本義勝さん

かつてこの清水に生息していたトミヨ。淡水では5~7cm程度の大きさで背に7~10本のトゲがあるトゲウオ科の魚。福井県では絶滅危惧種1種に指定されており、県内では越前市治左川にのみ生息しています。現在、許佐羅江清水でのトミヨの復活が検討されています。



平成2~3年当時の許佐羅江清水

また、近隣の地域からもこの名水を求め、多くの人々が訪れます。駐車スペースも完備され、安心して名水を堪能することができます。市では、希少種である魚、トミヨをこの清水に呼び戻すため、平成24年度から専門家による調査を行っています。平成30年現在、研究途中ですが、将来、この場所で絶滅危惧種のトミヨが復活し、泳ぐ姿が見られるかもしれません。

この許佐羅江清水の水には炭酸が含まれており、その清らかさとともに地域住民の人気の水となっています。夏休みともなれば、子供たちの声が絶えない、地域住民の憩いの場として多くの人々が訪れます。

また、近隣の地域からもこの名水を求め、多くの人々が訪れます。駐車スペースも完備され、安心して名水を堪能することができます。市では、希少種である魚、トミヨをこの清水に呼び戻すため、平成24年度から専門家による調査を行っています。平成30年現在、研究途中ですが、将来、この場所で絶滅危惧種のトミヨが復活し、泳ぐ姿が見られるかもしれません。

舟津七清水が枯渇あるいは消滅する中、この許佐羅江清水は、湧水量は少なくなつたものの、その姿をとどめ、この地域の水資源の豊かさを象徴する貴重な史跡として、平成23年に鯖江市指定の文化財に指定されました。この登録を機に、平成24年5月から東屋や水飲み場が整備され、現在の姿になりました。

この許佐羅江清水の水には炭酸が含まれており、その清らかさとともに地域住民の人気の水となっています。夏休みともなれば、子供たちの声が絶えない、地域住民の憩いの場として多くの人々が訪れます。

かつては、絶滅危惧種のトミヨが生息していた名水

<アクセスのご案内>

国道8号線、鯖江市にある「宮前2」交差点を五郎丸町方面へ。





歴史と由緒ある三峯山からの贈り物・刀那清水

地域住民の水場として使われてきた湧水・刀那清水がある上戸口町は、城山（俗称・三峯山標高404m）のふもとに位置しています。

この三峯山には、南北朝時代に南朝軍の武将、新田義貞の弟である脇屋義助が築いた三峯城跡があり、この城跡からは戦国時代に栄えた朝倉氏遺跡がある一乗谷が一望できます。

三峯山の中腹には、昭和12年頃まで三峯村があり、その広場にはイチヨウの大きな木があります。「泰澄大師の母親が夢のお告げを受けてこのイチヨウの樹皮を煎じて飲んだところ乳が出た」という伝説が残っていることから「乳授けの大銀杏」と呼ばれ、多くの人々から親しまれてきました。昭和56年の豪雪により、この大銀杏は、根元から折れてしまいました。折れた古木を地元有志らが穴を掘って埋めたところ、新芽が生え、奇跡的に再生した銀杏巨樹の代表例としても有名です。

さらに湧水地のある上戸口町の谷の奥には戸口滝（刀那の滝）があり、清流として知られています。

ここには、通称「イボ落し岩」と呼ばれる岩があり、巨岩の上部の窪みに溜まった水を、患部につけるとイボがとれるという言い伝えがあります。

こうした歴史・伝承のある三峯山の伏流水と考えられる刀那清水へ向かう道路も整備され、新たに看板等も設置されました。清水がある付近も道路が整備され、それに伴って刀那清水も再整備されています。



清らかな名水は留まることなく湧き出しています。



ふくいのおいしい水
刀那清水
信州県唯一の水質基準をクリアした湧水等を持つおいしい水として認定されています。
平成23年7月1日現在 環境省 認定

奇跡的に再生した
三峯山中腹三峯村
大銀杏(イチヨウ)



刀那清水から三峯山を臨む(正面の高い山が三峯山)



上戸口集落の入り口に立てられた看板が目印になります。

<アクセスのご案内>

鯖江市東部と福井市足羽地区を結ぶ県道25号から、市境に位置する鯖江市上戸口町に入り、田畑の脇にある。



歴史的価値が高い刀那神社



清流戸口滝(刀那の滝)



滾々と湧き出る桃源清水。中央の水の盛り上がり豊かな水量を象徴しています。

継体天皇を感嘆させた河和田塗り
写真提供: 鯖江市

積雪があっても次々に水を汲みに来る地域の人々。地域の
人々に愛され大切にされている清水です。

「花見」に訪れた多くの人々と、そこに生活する多くの住民の「命の水」であったことを今に伝えているようです。

<アクセスのご案内>

鯖江市河和田地区から県道192号を東進し、「ラボーゼかわだ」を過ぎ1.3km程進んだところにある案内看板のところを左折し、500m程進んだところ。



福井
おいしいの水
名水

19

桃源清水

鯖江市上河内町68字上水掛

人気の名水が復活して今に伝える「水の価値」

河和田地区の飲料水として親しまれてきた桃源清水ですが、平成16年の福井豪雨により被災しました。平成19年に地域住民の総力により復活した湧水です。

上河内地区は、古くに桃の木が栽培され「花見」で賑わうとともに「河内桃」として人気がありました。継体天皇が水源を探してこの地域へ来られた折に、桃を取ろうとして冠を落とし壊され、それを地元の河和田の漆器塗りが職人が見事に修復したことから、この地の河和田塗りに深い関心を寄せられるようになったとの言い伝えがあります。

こうしたことから天皇ゆかりの名水として地域の人々の「宝の水」となったのが桃源清水です。

その趣きある姿は、



復元されたバツタリ(水車)



山の上方には、継体大王が植えたと言われる薄墨桜が現存し、春にはご覧のような花を咲かせます。

も豊富であるため、古来から地域の人たちやこの地を訪れた人々の喉を潤してきた歴史ある清水です。

<アクセスのご案内>

鯖江市河和田地区から県道192号を東進し、「ラボーゼかわだ」を過ぎ1km程進んだところにある案内看板のところを左折し、200m程進んだところ。



福井
おいしいの水
名水

18

三場坂清水

鯖江市上河内町82字奥如来

人々の命の水として大切にされてきた清水

古くから地域住民の飲料として用いられてきた名水です。山の斜面上方の岩の間から水が湧き出し、それがパイプで水場まで導水されています。近くには、昔使われていた「バツタリ(水車)」を復活させ、昔見られた風景を再現しています。

この三場坂清水がある上河内町には、継体天皇が薄墨桜(エドヒガン桜)を植えたという伝説があり、昭和46年に市の指定文化財となっています。山に登ると、薄墨桜のほか、山伏が修行したと言われる山伏岩、さらに近くには、弁慶が向いの山から弓を射たとされる的岩があります。

三場坂清水は、こうした史跡の入口に位置し、水量



鬱蒼とした森を背負う榎清水。手前は駐車場。



名工が作った不動明王。



衛生面に配慮し改善された清水出口。



もともと清水があった付近。



地中から湧いていた頃の清水。

地域住民の手でつながってきた清水

大日如来の化身である不動明王が、この清水のある「あちら山」の山頂から駆け下りてきて、清水の湧き出る岩の上に腰掛けたことに由来しています。

この清水のあたりには榎（よのき）の大樹があり、空を覆い、人々に涼を与え、湧き出し流れる清水が心をいやしたといわれています。

「あちら山」というのは、標高415mの山頂を持つ、服部谷と水間谷の二つの谷を分かつ中核の山です。「あちら山」のあちらとは、インドのアチャラという言葉に由来し、「大山」「山のごとく動かざる」大日如来の化身としての「不動明王」のことだそうです。

この榎（よのき）清水は、もともと現在の場所から向かって左側方向の榎（よのき）の大樹の下にありました。地面から湧き出している湧水です。

年配の方にお聞きすると、子供のころにはよくその湧き水で遊んだそうです。そんなひっそりとした榎清水でしたが、福井豪雨のあと、その場所から自噴しなくなっていました。

そこで平成5年に地域の人々が集いボーリング工事をし、衛生面と管理を考えた上、土地所有者の協力を得て、現在の場所に榎清水を引いてきたということです。その時に三河岡崎の石匠である戸松甚五郎彫刻師の「不動明王」を安置したということです。

2年ほど前まではこの場所で、水に感謝する「水まつり、スイカ割や流しそうめん」を行っていましたが、少子高齢化により子どもが少なくなったことから、今では場所を変えて屋内で行っているそうです。伝説は、今でも息づいているというわけです。この榎清水、水量は多い清水ではありませんが、今なお、水を汲みに来る人の絶えない地域の人々の大切な清水です。



由来・伝説が記されている看板。

<アクセスのご案内>

県道2号を池田町方面へ向かう途中、横住町手前の右手。





千古の昔から集落の「命の水」

瓜割清水は、別名赤谷名水としてこの赤谷集落の人々に親しまれてきました。水に浸した瓜が割れてしまったことから「瓜割清水」と呼ばれています。

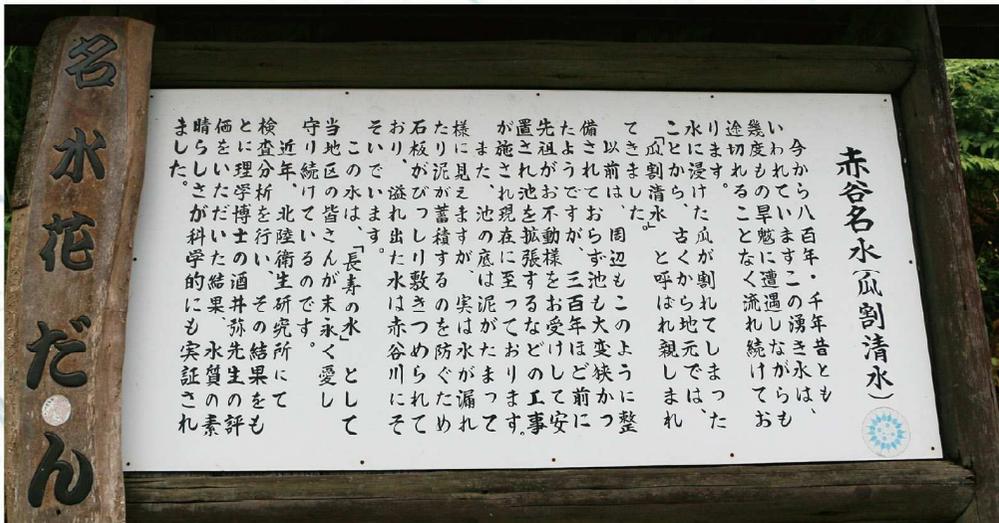
その歴史は古く、今から八百年前・千年前からとも言われています。その間、幾度の干ばつがありました、この清水の水は一度も涸れたことがないそうです。

地域の人の話によれば、白山系の水脈が大野市を経由してこのあたりまで来ているのではないかのお話でした。以前の瓜割清水は現在のように整備されておらず、池も大変狭かったようですが、三百年ほど前に先祖がお不動様をお受けして安置され、また、池を拡張して整備したということでした。

眼病に効果があると言われており、地区の住民からは長寿の水として親しまれています。

集落の人々にお聞きすると、それぞれ上水道のほかに井戸も掘っていますが、この清水は格段に美味しいとい

います。遠方からもたくさんの方がこの水を汲みに来る人気の清水・名水です。



写真左は、赤谷の山々と右下にある瓜割清水。
写真上は清水全景。
下の写真のように絶えず集落の人はもちろん、近隣や遠方からも人々が水を汲みにやってくる。



＜アクセスのご案内＞

県道2号を池田町へ向かい、県道117号へ右折、途中赤谷町へ向かう交差点を左折し、集落に入るとすぐ右手の東屋に位置する。





冬の治左川井戸と治左川。外気温に対し、水温が高いため水面の上に霧がかり美しい風景を創り出します。

集落内に端を発する治左川の湧水と同じ地下水を井戸で汲み上げています。生活の趣たつぷりのこの井戸は豊富な水量を誇ります。

治左川井戸の downstream には、地域の人々が利用する外川端（そとかばた）が設けてあり、現在でも使われています。

また、この治左川には、清流にしか生育しない梅花藻（バイカモ）が繁殖し、6月になると白い梅花藻の花が咲き誇ります。さらに、この川は淡水魚トミヨの県内唯一の生息地となっています。トミヨは、水のきれいなところに棲むトゲウオ科の淡水魚です。体長5〜6cmほどで水温の低い清水にしか棲めず、この治左川が日本のトミヨが生息する南限だと言われています。



梅花藻(バイカモ)。キンポウゲ科の多年草の水草です。清水に群生し6月下旬〜8月末ごろにかけて梅の花に似た小さな花をつけ、ご覧のように咲き誇ります。(写真提供:越前市)



トミヨ写真提供:石本義勝さん



トミヨは、水温10℃前後の水のきれいな湧水のある池や川にしか生息できません。雄が水草を集めて巣を作り雌に産卵させます。稚魚が泳ぎ始めると、巣からはみ出した稚魚を口の中に含んで巣にもどします。また、他の魚が近寄ると、背からトゲを出して巣を守る珍しい習性を持っている貴重な魚です。こうした希少種が人々の生活と共存・共生している環境は、未来に残していかなければいけない大切な貴重なものです。

<アクセスのご案内>

国道8号から、武生ICへ向かう
県道262号線を3kmほど東
進し右折、上真柄町の治左川沿い。





明治40年頃の泉風楼（現在の泉風）
（写真協力：福井県刊行会「ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 武生」より）



＜アクセスのご案内＞

JR武生駅の駅前交差点より南へ200m、県道190号との交差点を直進し、すぐ右手。または国道8号から県道190号に入り武生方面、ロータリー高架線を過ぎた最初の交差点を左折し、すぐ右手。



皆様へお願い
お車で水を汲みに来る方は、駐車できるスペースがありませんので
十分注意してご利用ください。

お不動さんも、もともとお清水川のところにあつたものを、
現在の場所にお祀りしたとのこと。
完成以来、徐々にこの清水の認知度が上がり、口当たりの良
い軟水ということもあって「おいしい水」として多くの人が水
を求めてくるようになりました。
毎月27日には僧侶がお経を上げにやってきました。形を変えな
がらも地域の大切な水として脈々と受け継がれ育ててきたこの
「お清水不動尊の水」、将来へつないでいきたい大切な文化遺産
です。

有志の思い「未来へつながる清水」
JR武生駅近くの住宅街にあり、自転車や自動車でも水を汲み
に来る人々が一日中絶えることのない人気の清水です。地域住
民からは「おしよさん」と呼ばれて親しまれています。向
かいのお蕎麦屋さんでは、この水で作った越前おろし蕎麦を味
わうことができます。
このお清水不動尊、誕生したのは平成8年ですが、清水その
ものは古くから湧いており、地域住民の間で大切に使われてい
たそうです。
以前このあたりは川になっており、お清水川と呼ばれていま
した。昭和初期まで、泉風楼料理店（現在の泉風）から北の林
病院にかけて沼地であり、清水は現在のお清水不動尊の水のあ
る裏手に湧いていたそうです。それが昭和40年ぐらいに湧かな
くなってしまったため、浅くボーリング工事をしたところ再び
水が湧き、地域住民の清水へと戻りました。
さらに、平成8年に有志を募り、現在のお清水不動尊の水が
完成しました。



石神の湧水はこの大虫神社横にあります。



大虫神社の前には文化庁登録有形文化財「御宮橋」があります。



武生駅から大虫町方面に行くとき、大虫神社と石神の湧水の案内板があります。

<アクセスのご案内>

越前市中心街から県道190号を西進し、大虫町区内の大虫神社の西隣に位置。



村人が重病になると「石神の湧水」を飲ませたと伝わる名水

越前市街から県道190号線を鬼ヶ嶽方面へ向かい、大虫区内の大虫神社の西隣に「石神の湧水」があります。

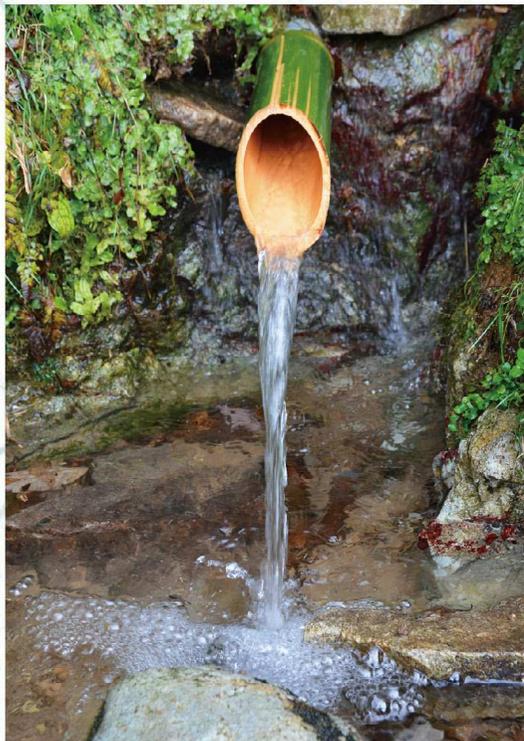
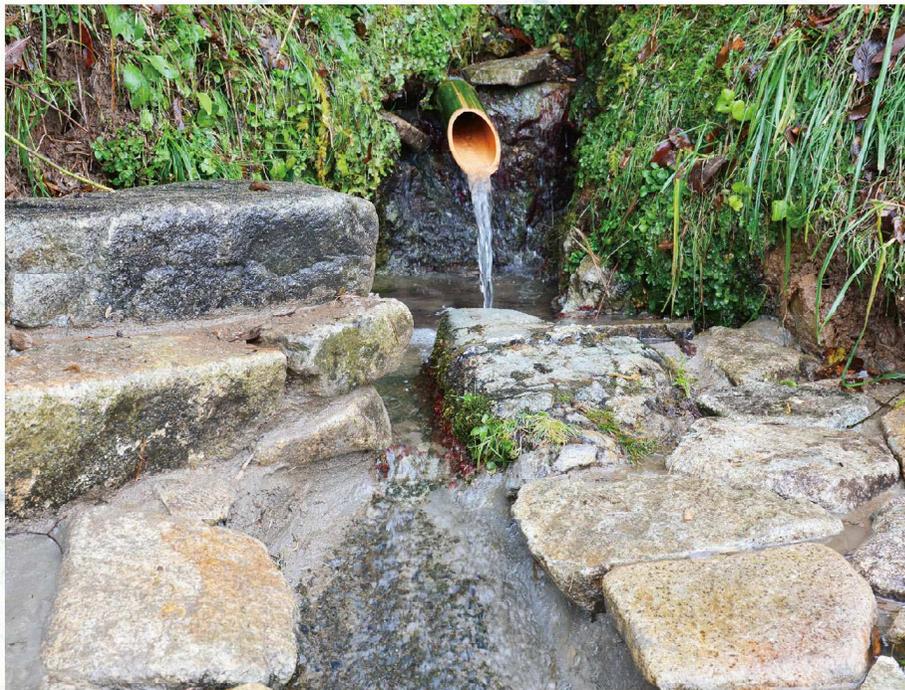
元々の水源は、もう少し鬼ヶ嶽よりの「石神」という地名にありました。その場所には、今から千年近く前に、一時期、大虫神社の宮司の館があり、村人はこの地を石神と呼ぶようになつたと言われています。ここに湧水が出現したのが今から650年程前、大虫神社社記によると、大地震大洪水があり、その時に岩盤に亀裂ができ、その割れ目から水が湧き出したと伝えられています。昭和29年には大虫集落の簡易水道として使われていましたが、平成6年に上水道が完備されたことから、現在の場所まで400m導水をし、大虫神社のすぐ隣に水汲み場として設置されました。

この「名水」を、未来に引き継ぎたい

現在、この「石神の湧水」は、大虫町の皆さんによって管理されています。もともとは有志の方々が大虫町の命の水で

あるこの水を「なんとかして将来へ継承していきたい」という強い思いから始まりました。そんな理由から、さまざまな工夫と努力で湧水地が形作られました。上の写真は新緑の季節の石神の湧水ですが、手作りの木の椅子が湧水横に設置されており、これも地域の方々の暖かい心遣いです。冷たく清らかな湧水を飲み、そのあと、ゆっくりと水の音を聞きながらくつろぐことができます。

この湧水の利用者は多く、地域の人々以外にも、遠方から「末期の水は石神の湧水で」という慣習も、少なくはなりませんが、未だに息づいているこの地域の「宝物」です。



＜アクセスのご案内＞

越前市西部の県道3号より金華山グリーンランドへ向かう山道のキャンプ場を過ぎた先のすぐ左手。



皆さんと一緒に名水を育てたい
 これまでもこの名水をご存知の方は、遠方から水を汲みに訪れ、料理や飲料水、珈琲の水として利用してきました。今後は、もっと多くの皆さんにこの「段田清水」を広く知っていただきたいという思いとともに、利用していただき、味わって欲しいと願っています。
 豊かな自然の中に古くから湧れることなく湧き出している清水ですので、大事にこの水を利用いただければと思っています。
 なお、冬季は雪のため閉鎖されるのでご注意ください。



自然観溢れる「名水」

金華山の山頂付近にある金華山グリ
 ーランドには、整備されたキャン
 プ場や、オートキャンプ場、コテージ、
 バンガローがあり、特に夏場は家族
 連れで賑わいます。県内だけでなく、
 県外からの利用者も多く、春・夏・
 秋の金華山の自然を楽しんでいます。
 山頂付近から見ることでできる日本海や、
 バーベキューを楽しんだ後の星空は、
 まさに絶景です。

このような魅力いっぱい
 のキャンプ場の管理事務所近くには、
 山の斜面の岩の裂け目から清水が湧
 き出しており、「段田清水」として知
 られています。一見すると自然の中
 に溶け込んでいる清水ですが、ここ
 に「名水」が存在しています。その
 水質の良さは、定評があり価値の
 ある名水・清水です。
 一度は味わっていただきたいふ
 くいのおいしい水です。



お社の後ろには御神体である不動明王が祀られています。



現在も豊かな水量を誇る元の湧水場



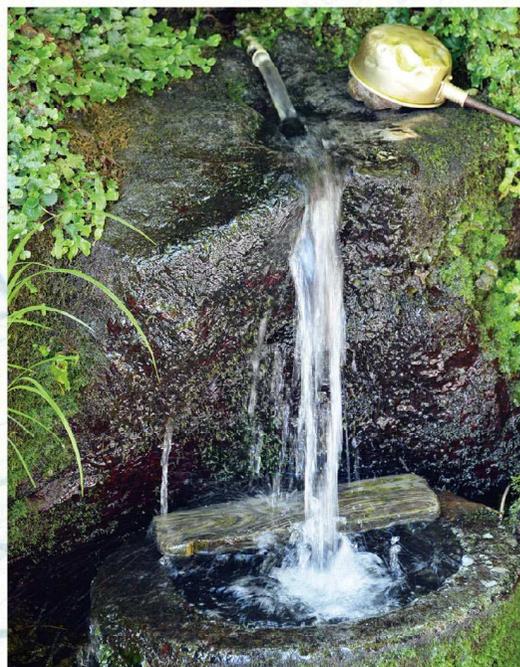
清水上方の岩肌からも滝々と湧水が溢れ出る



由来・伝説が彫られている石碑



県道19号線横の大きな看板の前が駐車スペースです。そこから上は(上写真)お不動様と霊水への参道です。関係者以外の方は、この駐車スペースに車を停め清水を汲みに行かれることをお願ひします。



千合谷町の「命の水であり宝」

解雷ケ清水は、古くから千合谷町の簡易水道として大切に利用されてきた名水です。この清水には伝説が残っており、今から約1400年前、戦火を逃れてこの地にたどり着いたといわれる百済の王女「自在姫」が水を求めていたところ、雷雨とともに落雷が起こり、この解雷ケ清水の岩を割り、そこから水が湧き出たと伝えられています。

千ばつでも水が涸れたことがなく、千合谷の集落の人々は、ここに不動明王を祀り、霊水としてとても大事にこの清水を奉っています。毎年七夕には清水に感謝する祭礼を行っています。こうしたことからいかに千合谷の人々にとって大切な水であることがうかがえます。

千合谷から車で10分ほどで日本海が望める越前海岸があります。古くから越前海岸より武生方面へ海産物や鮮魚が運ばれていましたが、この解雷ケ清水の水で冷やすと、新鮮なまま運搬できたと言えられています。どれほど冷たく清らかな水なのかがわかる言い伝えです。

これまで、この解雷ケ清水を清掃し、管理し、大事に整備してきたのも千合谷の地元の人々。初めは多くの人々にこの水を味わって欲しいという思いから看板を作り、利用を推奨してきましたが、山菜を勝手に取ったり、ゴミを放置するなど最近のマナーの悪さに頭を痛めています。霊水場であるというご理解とご協力をお願いします。

<アクセスのご案内>

旧武生市街から越前海岸米ノ浦に向かう県道19号、千飯トンネルの手前「解雷ケ清水」の看板がある参道を上った突き当り。



おたにのくすりみず
えんげんしょうおたに



現在は鬱蒼とした森の前にある大谷の薬水。手前は区画整備された田んぼ。区画前は鬱蒼とした深い森の中にあっただことが伺えます。



住民たちの強い気持ちで残った名水

大谷の薬水は、集落の人々が大切に使用してきた湧水です。いつから湧水があったのかは不明ですが、区画整理される前湧水地がもともと鬱蒼とした森の中に位置していたため、古くから水が湧き出していたと推測されます。言い伝えとして、一説には、鷲が傷ついたからだをこの湧き水で治していたことから、古来、この水があせもやできもの、虫刺され、タムシ等に効くと言われており、集落の人々に語り継がれてきた名水です。

以前は地面から湧き出る「湧き水」であったため、人々が使いやすいように土管を入れて水を貯め、汲みやすいようにしていましたが、衛生面を考慮し、現在の形になりました。湧水は涸れることなく湧き出し貯まっているそうです。大谷の薬水と言われるように、この水は、食事やお茶、洗濯などに使われるのではなく、あせもやできものができた際、水を汲んできて暖め患部に塗る、あるいは浸すと治ると言われてきました。実際に高齢の方々に聞いてみると自分たちが子

供のころ、あせもができると祖母や親が大谷の薬水を汲んできて治してくれたそうです。そして、現在でもその言い伝えは残っており、集落の人々は大切な水として使っています。

大谷の薬水の側にある越前町営の老人憩いの家「陶寿園」では、この大谷の薬水でお風呂を沸かしています。泉質はマグネシウム、カルシウム、各種イオン分含有しており、効能として神経痛、慢性リウマチス、外傷皮膚病、胃腸病、疲労回復等に効くといわれています。

このように大谷の薬水は、現代の生活様式の中に生かされ使い続けられています。

集落の人々の「水」に対する感謝の気持ちと畏敬の念が、大谷の薬水を「ぶくいの名水」として未来につなげていることは誇らしいことです。なお、車を停めるスペースがありませんので、近くの広いところに車を停めてから徒歩で行くことをお勧めします。



<アクセスのご案内>

国道417号朝日交差点から
県道187号を南へ約3.5km。
陶寿園付近の小川沿い。





信仰とひたむきな努力がこの霊水を支えてきた

弘法大師の水は、病気を治す霊水として有名で、周辺住民はもとより遠方からもこの水を求めて多くの人が水を汲みに訪れます。「弘法さんが治してくれる」と願いながら飲むと病気や怪我が治るといふ言い伝えがあります。水量は多くはありませんが、安定的に湧いている水です。

現在は、舗装された道路から階段を降りたところに位置していますが、道路が整備される前は、このあたりは長い谷となっていたそうです。

弘法大師の水のすぐ隣には弘法大師をお祀りしたお堂があり、隣接した住民が、代々受け継がれてきた教えとして、お掃除やお堂の管理をしています。

130年以上前からお堂はあ



つたと伝えられています。昭和62年に高野山から高僧をお迎えしてお堂が再建されました。毎月21日は、弘法大師入定の日として、御花を供え、お参りを欠かさないそうです。こういった方の地道な労力の積み重ねによって名水が守られていることを皆さんにもぜひ知って欲しいと思います。

以前は、お堂が一杯になるくらいの人々がお参りにきていたそうです。その子孫たちも今では高齢となり少なくなりましたが、お参りに来る人々は絶えません。時として、高野山の僧が修行の途中でこのお堂と水に立ち寄り、お経をあげていく姿も見られるそうです。

○故事来歴・いわれ

大正8年9月5日、高野山奥の院優婆塞英麿氏が真言宗行者の北陸巡業の折、越前の国平等村の須磨亀吉氏、当時46才を訪れ、布教に数多くの行績を残し、一室一石、観音経普門品、二千八十文字を小石に記し埋没し、自ら高野山に参道して弘法大使の御影を安置し、1ヶ月後何処となく立ち去った。昭和62年高野山より高僧を迎えて再建し、10月27日に落慶。今も地元住民の心の安らぎにお参りする人が絶えない。



<アクセスのご案内>

越前町、国道365号より平等地区へ入りすぐ、ヘアピンカーブの谷間の下。





岩の割れ目から盛り上がり湧き出る鶯清水。近くで見ると、その力強い湧水に圧倒されます。「霊水」といわれてきたこの名水を一度は味わってみたいものです。

J R南条駅の線路を挟んだ反対側にあります。昔から街道沿いにあり、旅の疲れをいやす憩いの水として親しまれ、朝倉孝景も文明6年（1474年）の柚山合戦の際、ここで休息したと伝えられています。

現在は、左下の写真のように、左手に南条駅をみて、その右手前が鶯清水です。まだアスファルトの道路がなかった昔は、山裾から湧き出る水が、旅行く人の喉を潤したことでしよう。

現代の中に忽然と現れたような鶯清水ですが、名水と言われるその水は、現在も滾々と湧き出し「霊水」として親しまれています。湧水の脇には、お仏像が祀られており、この地の人々の水に対する感謝と、自然への敬いの心が現在まで脈々と受け継がれています。



石碑（下の写真）の文章です。

往古は日野川が山の麓まで迫っていました。このため北陸道は鱈波から割り合峠を越え西大道の山麓地帯を通っており（石倉家文書）、街道筋にあった「うぐいす清水」は、旅の疲れをいやす憩いの水として親しまれていました。朝倉孝景も柚山合戦の時（文明6年）、この清水で休息したと伝えられています。珪石と粘板岩の互層の間を通って尾先から流れ出る清水は、水量も変わらず冷たくまろやかで、「霊水」として近郷の人達から愛用されてきました。

明治11年の明治天皇北陸巡幸の際、御休所となった中山家ではこの水を御用水に供しています。

脇本の庄、七清水の一つに数えられています。鱈波駅の建設・構内拡張・農免道路建設により三たび山裾が削られました。昔と変わらぬ水が湧き出ています。



<アクセスのご案内>

JR 南条駅の裏、線路を挟んだ駅裏の山裾にある。





明治10年2月に作成された滋賀県管轄地図（一部抜粋）。「美浜町歴史文化館提供」
美浜町が滋賀県を通り京都と交流のある主要な道であったことがわかる。



上から下り方向右側が湧水地



下から上り方向左側が湧水地

皆様へお願い

この湧水は道路の真横にあります。すぐそばがカーブになっているため道路上には車を停車させないで下さい。ご利用の際は、近くの駐車スペースに駐車いただくとともに、道路横断および、水が流れる側溝には十分気をつけてください。

新たに認定された「豊かな水環境のシンボル」

平成29年11月15日に、美浜町新庄地区の名水が新たに「ふういのおいしい水」に認定されました。名水の名は、「若狭美浜 新庄やまびこふれあい湧水」。

この湧水がある「道」は、古くから滋賀県高島市マキノ町と新庄地区を通り若狭湾を結ぶ「粟柄越」（あわがらごえ）と呼ばれる古道、重要な交通路であったと言われていました。若狭から滋賀を通じて（琵琶湖の航路利用）京都へ物資が、またその逆に京都の文化が滋賀を経由して若狭へ。こうした交通路を行き交う人々、そして、地元新庄の人々の喉をやさしく潤してきたのがこの名水です。

新庄から滋賀へ続く山々は、その95%が自然林であり、豊かで貴重な自然が残されています。そうした環境が豊かな水環境を創り出してきました。

「粟柄越」古道を含む、若狭路・美浜トレイルも整備され登山客も年々増加する注目のスポット、出発点が新庄地区です。

新庄地区は、この名水を「豊かな水環境のシンボル」として、これからさらに整備し、多くの人々に愛される「ふれあいの湧水」に育てていきます。新庄地区ではこの名水の他に、将来ビジョンを策定し、活力ある新庄区・住みよい新庄区へ自然いっぱい笑顔いっぱい豊かな新庄区をキヤッチフレーズに、1300年以上の歴史を持つこの里山を活性化していこうとしています。

名水の周辺には、「溪流の里」や「森と暮らすどんぐり倶楽部」「わいわい楽舎」など様々な体験もできます。「エコ・グリーンツーリズム」など様々な体験もできます。誕生したばかりの名水ですが、これから末永く新庄の「宝」として多くの人々に愛される名水に育てられていく計画です。

＜アクセスのご案内＞

舞鶴若狭自動車道、若狭美浜ICより国道27号線を小浜方面へ向かい、三叉路を左折、県道213号松屋・河原市線を松屋方面へ。耳川水力発電所から南に約100m。県道をのぼると左手に見えてくる。



耳川中流から上流方向を望む



耳川上流、良型のイワナやヤマメが棲む清流



若狭美浜 新庄やまびこふれあい湧水の水源地の山「黒丸」（写真左）。水脈を通り岩の割れ目から溢れ出す湧水。なかなかの水量である。軟水で柔らかく飲みやすい（写真右）。





瓜割の滝の水量はたいへん豊かです。神水と呼ばれるだけあってその威厳ある風光明媚なその姿には圧倒されるものがあります。

水ノ森（うりわり）の由来

水ノ森大明神の縁起によると、今から約一、三〇〇年前の養老年間、天徳寺の開基泰澄大師が宝匡ヶ獄に登って馬頭観世音菩薩を刻み、神水のあるところに草庵を建て安置するべく霊地を捜し求められるも水情なく、宝匡ヶ獄の岩の上に尊像を安置して悲しみ嘆いたところへ、南方の二本の古木の間より、頭に白蛇を頂いた龍馬が飛来して「我は北天竺の八大龍王なり。観世音菩薩の御威光と、大師の御徳を感じ我が北天竺の水を移して永くこの泉に留まり天下泰平五穀豊穡を祈るなり。もし末の世に至りて昇天つづき五穀に乏しいときはこの泉に参詣して雨を祈るべし。また甘泉を手にくい諸病退散福徳圓滿を祈るべし。」と彼方の岩窟に入るや四方に神光を放ち大地鳴動し、岩破れて神水湧き出、この神水をもって駒清水（現在のうりわり）と名づけられる。

年を経て御村上天皇の御代、当寺の先代元真僧都が、霊泉の近くに飯の草堂を建て馬頭観世音菩薩を安置し、日夜駒清水の神水を供え祈願するや、菩薩は光明を放ち、異香四方に薫じ、無上の心を発して観音菩薩の威神力を表る。以来噴出する霊泉は日月星辰日を経れども寒暑の区別なく、如何なる昇天地変にも異変を来さず、特にこの霊域は雨乞いの地として有名である。

またこの霊泉に染まる紅色の石は八大龍王が北天竺より神水をここへ移したとき、体内の血が混じったものであると伝えられている。駒清水（うりわり）の前の川の向こうに相對して小高いところに、大蛇が横たわる如き帯状の大きな岩を龍王岩と云い、八大龍王（水ノ森大明神）が鎮座して駒清水を見下し、守護していると伝えられ、この一帯を水ノ森と名付けられている。

この水ノ森の背後の山を吠山と云い、この山頂付近に十数メートルの大きな岩を観音岩と云い、泰澄大師が観音菩薩を刻み、岩の上に安置したところである。

また、この麓に奇妙な穴のある岩を吠岩と云い、七日夜雷の如く鳴動した岩であると伝えられ、このお山一帯が宝匡ヶ獄で、水ノ森を含め修験者の修行道場である。

駒清水の湧き出るところに修行の成就と安全を祈願し、さらに霊泉の守護不動として、不動明王を安置しているが年代は明らかでない。駒清水をうりわりと呼ぶようになったのは、明治年間、冬は暖かく湯気立ち上がり、夏は瓜が割れるほどの冷水によるもので、うりわりと呼ぶようになったといわれている。

「天徳寺 水ノ森（うりわり）の由来」より紹介



地元はもとより、近隣他県からも「神水」瓜割の水を汲みに来る人々が後を絶たない。写真右上は鳥居の奥の岩の割れ目から勢よく出る神水。



若狭町には、山あいの岩間より大量の水が湧きだし、滝を作っている「瓜割の滝」があります。

「瓜割の滝」の由来は、あまりの水の冷たさに瓜が割れてしまったという伝説に由来し、天徳寺の開基、泰澄大師の昔（約1300年前・養老年間）から神水と尊ばれ、五穀成熟病退散の靈験ありと信じられてきました。

水中には大変珍しいベニマダラという紅藻類が繁殖しており、このため水中の石がすべて赤く染まっています。



写真上の赤く見える岩の部分が淡水産紅藻類ベニマダラ(学名「ヒルデンプリンチアリプリス」)。水のきれいな日陰の流水の底や岩の面に赤色の斑点として成長し岩の面を鮮紅色～赤褐色におおいつくす大変貴重な紅藻類。いかにこの水が綺麗で冷たいかがわかります。

周辺は若狭瓜割名水公園として整備され、連日観光客が訪れて交流の場となっています。

公園駐車場には、名水を提供するための水汲み場が設けられ、多くの利用があります。

<アクセスのご案内>

舞若道若狭上中ICより国道27号小浜方面へ約30分、小浜ICより国道27号敦賀方面へ約30分。「瓜割の滝」の看板がある。





「お水送り」が行われることで有名な名水

鶺鴒の瀬給水所は、遠敷川の中流域にあります。遠敷川の上流域は、林野庁の水源の森百選に選定されています。

鶺鴒の瀬給水所は公園として整備されており、鶺鴒の瀬資料館ではお水送り行事や、観光などの映像を見ることが出来ます。

近くには国指定重文の神宮寺本堂・仁王門や若狭姫神社、若狭彦神社など古寺古刹が点在、その中でも神宮寺は、鶺鴒の瀬を舞台に繰り広げられる

毎年3月2日に神事「お水送り」が行われることで有名です。

春を告げる行事として全国的にも有名な奈良東大寺二月堂の「お水取り」の水は、鶺鴒の瀬から送られ、東大寺二月堂の「若狭井」に届くとされています。



神事「お水送り」

「お水送り」伝説

天平勝宝4年(752年)に、実忠和尚が奈良東大寺の修二云(祈りの行法)に日本国中の神々を招いたところ、若狭の遠敷明神が遅れてきました。遠敷明神はそのお詫びとして、御本尊に捧げるお水を献上するため祈願したところ、岩が割れ、白と黒の2羽の鶺鴒が飛び出し、水が湧き出したと伝えられています。以来、遠敷明神は毎年、鶺鴒の瀬から水を送るとし、東大寺二月堂のこの井戸は、「若狭井」と名づけられています。

毎年3月2日に東大寺二月堂の若狭井に香水を送る「お水送り」の神事が行われており、神宮寺境内の大護摩から松明にもらい受けた火を手には、鶺鴒の瀬まで約2キロ、三千人を超える松明行列が続きます。



＜アクセスのご案内＞

小浜市遠敷地区より、国道35号を遠敷川を上流方向へ約3km遡った先、県道の対岸。



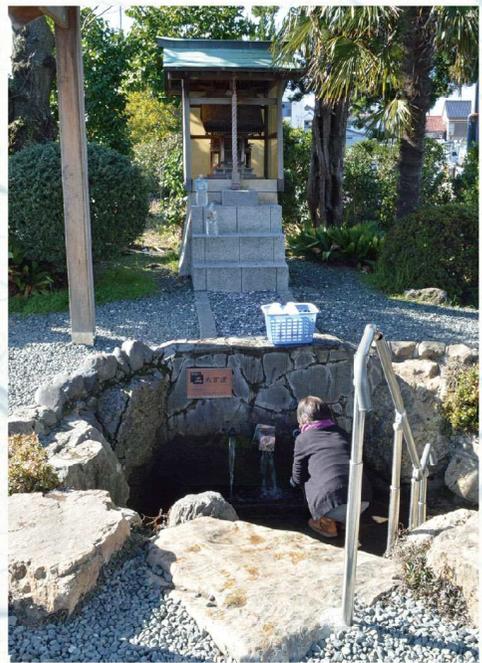


驚くべきことに、雲城水は港の目と鼻の先に存在します。これだけ目前に海水が迫っているにもかかわらず名水が濁れず豊富に湧き出し、海辺の人々によって生活水として使われてきたことに驚かされます。



絶えず水を汲みに来る地域の人々

この雲城水では、現在でも多くの地域住民がこの名水を汲みに来ます。地域住民にお聞きすると、「口に入るものは全部この水で作りますよ!」「全然味が違いますよこのお水で料理やお米を炊くと」「この水がなくなるかと不安なのでいつも家にはあるように毎日汲みに来ています」など、住民の人気は大変高いものがあります。写真撮影をしている間にも次から次へと近隣から車で、水を汲みに来る人々が絶えません。



湧き水が細ることなく豊かに噴き出す水は、海辺の人々にとって欠かすことのできない大切な宝です。心からの感謝である「水祭り」は住民の水への思いの表れです。無くしてはならない感謝の心への伝統です。

雲城水は、海のすぐそばの雲城公園内で、地下30mの砂礫層から淡水が自噴しています。地区の人たちによって整備され、地域の名水として大切に使われてきました。「雲城水」とは、このあたりの湧水すべての総称です。この雲城水のある地元の一番町は、各戸に掘り抜き井戸があるほど、地下水に恵まれた場所です。その反面、水禍に見舞われることも多く、昭和30年に、東京日本橋から水天宮を勧請し、雲城水の脇に祀りました。毎年7月23日には「水祭り」を行い、水難除け、水への感謝を祈願しています。まさに「水と共生」してきている証です。

地元の一番町振興会では、地元業者との共同企画でこの水を使った豆腐や日本酒などを作っており、いずれもこの水が、水源の森百選に選定されている上根来水源の森から百年かかってこの地に湧き出るといわれていることから、「百伝ふ(ももつたふ)」と命名されています。また、若狭地方特産の葛(くず)で作られるくずまんじゅうは、この水で冷やされ夏の風物詩として有名です。



左の写真は、東京日本橋から勧請した水天宮。右の写真は「水祭り」。



<アクセスのご案内>

小浜ICから小浜市市街地方向へ西進した後、国道162号を北進し、NTT前交差点を左折してすぐ。





海の目の前で自噴する津島名水

「雲城水」から150m北西にあり、雲城水同様、すぐ目の前は船着場、漁港に面した海岸近くで湧き出している水です。地域住民が管理しており、水場には屋根が設置されています。地下から湧き出る水は、海に隣接しているにもかかわらず海水のまじり気のない真水です。機械によるポンプアップではなく自噴で湧いています。地域の人々は、飲料水やお茶やコーヒーなどのための水、お米を炊いたり、料理を作ったりする大切な生活水として使ってきた文字通りの名水です。中には畑の水として汲んでいく人もおり、「この水で野菜やスイカを育てると甘みが増すんだよ、美味いんだよ」と話されていました。

地元の方々に聞いてみたところ、いつからあったのかということ は不明ですが、古くから使われてきたのではないかとのことです。以前、このあたりの地域には廻船問屋が5〜6軒あった時期があり、船乗りたちがこの水を汲みにきていたそうです。航海のための貴重な水としても使われていたわけです。

また、魚の水揚げ場も近くにあったことから、津島名水を活用して魚の加工を行っていたそうです。地域住民は洗濯から炊飯、食器を洗うことまでこの水を使っていました。

この水を中心に地域のコミュニティが形成され、情報交換や会話の場所としても機能していた大切な水場です。

現在は、当然ながら各家に上水道が完備されていますが、それでもなおこの津島名水を汲みに来る人々が一日中耐えないことに驚かされます。

そういった意味では、今なお続く「水を中心とした社交場」と言えます。

生活に密着した大変貴重な存在です。



一日中この水を汲みに来る近隣の地域住民。用途は様々だが、声をかけさせていただくと皆さん笑顔で応えていただける。まさに、現代の井戸端、コミュニティの中心的存在になっているのが、小浜市の津島名水。

<アクセスのご案内>

小浜ICから小浜市市街地方向へ西進した後、国道162号を北進し、NTT前交差点を左折した後、一つ目の信号を右折してすぐ。





「滝水ひめ」の名水の周りには、古くからの歴史の痕跡が各所に見られます。こうした「痕跡」を楽しむのもこの場所の魅力です。滝の左にある不動明王堂に手を合わせ、自然の恩恵に感謝しながら「滝水ひめ」の名水を楽しむ、心が洗われるようなひと時です。

「滝水ひめ」の名は、天智天皇（661〜671年）頃政変を逃れ大内からおくだりになってこの地に住んでいたという伝説のお姫様の名前に由来しています。

地下から汲み上げている水ですが、硬度が比較的高く地元企業がミネラルウォーターとして販売する名水です。父子（ちちし）の集落は、その小さなエリアに神社や寺院、山の神や薬師堂、不動明王堂が点在する歴史と文化豊かな地域です。

この場所は、以前、垂水神社という社があり「若狭国神名帳」に載せられていたほどの名のある神社でした。

垂水は、流れ落ちる滝のことで、集落の人々にとって生活に欠かすことのできない清らかな水に感謝の意を込めた社として祀られてきましたが、明治44年に静志神社に合祀されました。現在では境内があった場所、「滝水ひめ」に向かって左手にある垂水（滝）の横に、不動明王（不動尊）の小祠が安置されており神聖なる場所です。

「滝水ひめ」がある「不動の滝公園」は、集落の一番奥に位置しています。ここへ入る途中、鹿や猪の侵入を防ぐゲートがありますので、ここを開け、きちんと閉めてから入ることをお願いします。

脈々と続く水への感謝「不動講」

この場所には、かつて石灰業が盛んであった頃に、石灰山で働いていた人々によって祀られていた山の神の小祠や、伴信友の詠歌が記された石碑が建つ他、滝周辺が「不動の滝公園（ふるさと小公園）」として整備され、バーベキューハウスや清流の家などの施設を利用することができます。

現在でも、集落の人々は毎月28日に不動明主に御経を上げた後会食をする「不動講」を清流の家で行っています。こうした水への感謝を象徴する行事を大切に伝えているのが父子の伝統であり魅力です。

<アクセスのご案内>

おおい町、県道1号により大飯高浜IC方面へ向かい約3kmの父子地区に入り、不動の滝公園の突き当り。



毎月行われている水への感謝「不動講」。



「滝水ひめ」横の不動の滝



名水「滝水ひめ」

「ふくいのおいしい水」パンフレットについて

このパンフレット製作にあたり、日本三大和紙の一つである福井県の「越前和紙」の模様を使用しています。

和紙漉きに清らかな水は欠かせません。

これも福井の「宝」です。

越前には、全国でも例のない紙漉きの「神」の伝説が残されています。約1500年前、男大跡皇子（後の継体天皇）が越前にいたころ、岡太川の上流に実に美しい姫が現れたそうです。

「この土地は清らかな谷水に恵まれているので、この水を紙を漉いて生活を立てるとよい。」そう言って、里人達が紙の漉き方を丁寧に教えました。これに喜んだ里人達が姫に名を聞いたところ、ただ「岡太川の川上に住む者」とだけ答え、そのまま姿を消してしまいました。以後里人達はこの教えに従って紙漉きを始めたといえます。水の国「ふくい」ならではの伝説です。

取材をしているうちに、ふと不安に陥ることがあります。古いものでは千古の昔から伝えられた名水、そして、地域の人々が管理し、守ってきた名水。それらを、今、守っているのは、その大切さを親として祖父や祖母から教えられて生きてこられたご高齢の方々です。使うのは若い方々も多いのですが、実は、お金を持ち出し、清掃や管理に汗を流しているのは地元のご高齢の方たちです。このままではいけない、その方々がなくなった後、「ふくいのおいしい水」たちもその姿を消してしまいます。次の世代が引き継ぎ、守つていかなければやがて消えてしまいます。

確かに、水道がほぼ全戸に整備された現代ですが、水道の水と「ふくいのおいしい水」は意味が違います。価値も味も違います。

福井の由来は「福よかな井戸」という説もあるように、水に恵まれた福井県民にとって、水は本当の「宝」。この「名水価値」を是非この機会に考えていただければと思います。未来へ伝えていきませんが、福井の「宝」を。

取材・撮影・デザイン 鈴木順一郎

編集後記

「ふくいのおいしい水」を取材・撮影・文章・デザインを作り上げる過程であらためて気づかされたことは、高山から日本海まで「水」が繋がっているということでした。勝山市の奥北谷から流れ出す融雪水は地上と地下を通り、九頭童を中心に川となり様々な方向へ地下水脈となって日本海へ流れだします。

そこには間違いない私たち人間を含む様々な生物の営みが関わり、やがて、日本海へとたどり着きます。そして栄養たっぷりの陸からの水は、海の森を育て、恵みの海へと変化していきます。その海の水が太陽の恵みの光によって蒸発し、雪や雨にその姿を変えます。まさにこれが大自然のサイクルです。全部が繋がっているんですね。

その途中で湧き出しているのが「ふくいのおいしい水」たち。その言い尽くせない程の歴史と価値ある「おいしい水」を、あたり前のように飲むことのできる福井県民は幸せという以外に表現のしようがありません。

この「ふくいのおいしい水」に認定され、紹介させていただいている湧水はすべて地域の人の管理の下、守られ伝えられてきたものです。行政が管理し、提供している名水では有りません。



勝山市奥北谷「山雪からの恵水」

今回使用させていただいた越前和紙模様



和紙模様協力：越前市 清水和紙株式会社

写真・情報提供：福井市・大野市・勝山市・坂井市・鯖江市・越前市・越前町・南越前町・美浜町・若狭町・小浜市・おおい町

「ふくいのおいしい水」についてのお問い合わせ先

〒910-8580 福井県福井市大手 3-17-1 福井県安全環境部環境政策課

電話：0776-20-0303 ファックス：0776-20-0734 E-mail：kankyuu@pref.fukui.lg.jp

<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/kankyuu/water/goodwater.html>



新緑の若狭湾「地上の森と海の森」